

「豊かさの条件」を読んで

情報通信工学科4年 天野 未来

ある時ふと気が付いた。私は大部分のことに無関心である、と。新聞を読み自分なりの意見を述べる事もできるし、映画や音楽鑑賞して涙することもある。それでも心の奥底には冷たい自分がいて「本当はどうでもいいくせに」と囁くのだ。人との会話を笑顔でこなしていても、どこか「くだらない」という思いが常につきまとう。そんな自分に大きな不安を感じていた。今後自分の将来を大きく左右する進路についてさえ、どこか他人事のように思い取り組む自分が嫌いだった。そうした思いのはざま、私はこの本を読んだ。

豊かさとは何か。人が一生涯追い求めるものであり、人が生きる意味にもつながるものである。筆者の暉峻さんは、経済が現代人にとって最重要命題となっている現況を鑑み、人がゆとりを持つことを重要視している。そして、そのために様々な社会的制度の見直しを掲げる。

豊かさを判断する基準は物質ではない。まして財産であるはずがない。自分が豊かであると判断するのはそれぞれの人の心だからである。心はお金で買えるものではない。もしも心の中にある自分にとって最も大切な人の思い出と、それまで手にしたことのないほどの多額のお金を両天秤に掛けてどちらを取るかと問われたならばどうだろう。心の中に空虚な世界を作ってまで、金銭に執着できる人はいないのではないだろうか。いや、いたとしてもその人がそうしたことを後悔することは疑いない事実である。従ってどんなに自分にお金をつぎ込んだとしても、豊かさを得ることはできないのだ。そういった点で筆者が言うように現在の経済を重視する社会に豊かさは存在しない。しかしながら、私には制度を変えるだけでは、人々が豊かさを手に入れられるとはとても思えない。同時に重要なことがあるはずだ。

私は「無関心」である状態をまずしいと捉え、その状態である自分を嫌っている。なぜか。私の考える豊かな人生には、常に人との繋がりが存在しているからだ。誰かと心を通わせることができた時。それは相手と自分の思いが共有され、同じである場合だけではない。たとえ考えは異なっているとしても、そのことが分かるにはお互いの心を伝え合うことが必要となる。数えきれないほどの人との繋がり。それによって心が満たされていくこと。これこそが豊かさを手にした状態ではないだろうか。そしてこうした私と日本の教育制度の間に、私はある関連を見ている。

日本の現状、中でも教育制度は今まで私が直接関わったものであり、今の私を形成する上でも重要な役割を担っている。筆者も豊かさを論じるにあたって教育制度に言及している。では、その日本の教育制度は豊かさを生むものか、それとも貧しさを作り出してしまうものか。この本を読む限りでは、貧しさのほうと言わざるを得ない。

世論にも日本の教育制度の問題を主張されるものがある。例えば、日本の教育が「不登校やいじめ」を生じさせている、といったもの。しかし、そういった現象画と制度との関わりに終始した見方は大きな誤りではないか。私が教育に貧しさを見るのはこういったところではない。例えば不登校やいじめをする子供は、現在の教育制度が相容れないものであることを明確に自覚し、ただそれを周囲に表現しているとも言える。制度と自我とのへだたりは、ある意味で制度の不備とも言えるが、それならば多数の自我に見合った制度などあり得ない事も同時に理解されるのである。思うに日本の教育制度が生み出してしまったのは、私のような「無関心人間」である。これは今の日本に教育制度を素直に受け入れてきた子供にこそ当てはまる矛盾ではないだろうか。ならば、一度制度によって生じた「無関心」は、皮肉にも制

度の変革では消えないのである。

実社会へと出れば、今まで以上に広く深い世界が私の前に開けるだろう。新しいものが次々と私の中へ流れ込む。その世界で私は豊かさを求める努力をしていきたい。そんな時、自らが持つ「無関心」という鎖に縛られているがために、世界が狭まってしまったら。

私は「無関心」である自分が嫌いである。だからこそ「無関心」という心を外から見えないように見えないうように仕舞い込んできた。しかし、嫌いだ、という一言で自分の心から目を背けて良いはずがない。ずっと背を向けてきた「無関心」という心に、真正面から対峙する必要を強く感じている。

豊かさとは人のあり方の問題である。「何にでも関心を」など言っても恐らくは綺麗事でしかない。物事に対して「関心」「無関心」のどちらの目を向けるかを周囲との関わりの中で決心する。そして、決心するまでの過程を自覚し生を全うする。この自覚によって私の心身は豊かさに包まれるだろう。

書名 「豊かさの条件」 著者名 「暉峻 淑子」 出版社 「岩波書店」